

## 〈 水 稲 〉

### ○登熟向上を図る水管理

- ・ 出穂後30日間は間断かん水を実施し、土壤水分を保持しながら稲体の活力を維持します。出穂が遅れたほ場や登熟が遅れているほ場では、登熟の状況に応じて落水時期を遅らせる等の対応をとります。

### ○台風等による被害対策

- ・ 9月は、台風が本県に接近しやすい時期です。台風は、強い風雨を伴うため、倒伏や風水害の被害が発生する場合があります。
- ・ 倒伏すると受光体勢が著しく悪化し、登熟の低下による減収と穂発芽による品質低下を招くため、倒伏した場合は対策として次の事項を実施します。
  - ① ほ場の停滞水は早めに排水します。
  - ② 早期に倒伏した場合は、速やかに4株ずつ束ねて立て直し、穂が乾燥するようにし、あわせて田面水の排水も実施します。
  - ③ 登熟後期の場合は、早めに刈り取るとともに穂発芽した部分の刈り分けを行い、品質低下を防止します。

### ○適期の刈り取り

- ・ 出穂後の日平均気温の積算値による刈り取り目安は、早生種は950～1,050℃、中晩生種は1,050～1,150℃です。
- ・ 本年の登熟の進みは平年並となっています。しかし、登熟の進み方にはほ場間差が見られることから、最終的な刈り取り時期の決定は、各ほ場の籾の黄化程度を必ず確認し、黄化が90%に達した時期で判断します。

### ○コンバイン収穫

- ・ コンバイン収穫は、損失粒やワラ・穀粒の詰まりが発生しないように、稲の生育量に合わせた作業速度とします。
- ・ 収穫時の籾水分は25%以下が望ましく、収穫の作業時刻は稲体が乾燥している午前10時～午後5時頃に行います。

### ○高品位米に仕上げるための乾燥・調製

- ・ 高水分の籾いきあまいや活青米の多い籾などの場合は、籾含水率が20～18%まで低下した時点で乾燥機を休止し、籾全体のテンパリングを行ってから仕上げ乾燥する二段乾燥を実施します。
- ・ 籾摺りす作業は、穀温が高いと肌ズレ米が発生しやすいので、穀温が常温まで低下してから行います。
- ・ あきたこまちの調製は、米選機の網目1.9mm使用を基本とし、整粒歩合80%以上を確保します。

## 〈 大 豆 〉

### ○紫斑病の防除

- ・紫斑病の防除は、開花期20日～30日後に行います。防除適期を逃さないよう計画的に作業を行います。
- ・トップジンM剤やベンレート水和剤は耐性菌の出現により十分な効果が期待できないため、他の剤を使用して防除します。

### ○マメシクイガの防除

- ・マメシクイガの防除は、適期となる8月下旬～9月上旬に確実に行います。パーマチオン水和剤、アグロスリン乳剤、アディオオン乳剤は残効が長く、1回の防除で十分です。他の剤の場合は2回防除が必要です。

### ○台風等に伴う排水対策

- ・台風や秋雨による停滞水や倒伏が発生すると登熟に悪影響を及ぼすことから、明きよや排水路の点検・補修等により排水対策を徹底します。

## 〈 小 麦 〉

### ○排水対策

- ・水田転換畑における栽培では、ブロックローテーションによる団地化を図り、9月上～中旬までに弾丸暗きよや心土破碎による排水対策を徹底します。
- ・溝掘機を用いてほ場の周囲及びほ場内に深さ20～40cmの明きよを縦横に施工し、地表面排水を徹底して行います。明きよは、ほ場内に水が停滞しないよう確実に排水口に結びつけて整備します。

### ○土壌の酸度矯正

- ・土壌診断に基づき、播種前に苦土石灰や炭カル等によってpH矯正を行います。小麦の生育に好適な土壌pHは6.0～7.0です。ネバリゴシではpH5.5以下のほ場では生育不良となるため、適正なpHに矯正する必要があります。

### ○種子の準備と種子消毒

- ・種子は、採種ほ産を使用し、毎年種子更新を行います。
- ・種子伝染性病害防除のため、ベンレートT水和剤20（乾燥種子重量の0.5%粉衣）又はホームイ水和剤（種子重量の0.5～1.0%粉衣）で種子消毒します。

### ○耕起・施肥

- ・耕起、整地は、基肥施用後の播種直前に行うようにし、碎土率（2cm以下の土塊の割合）60%以上、耕深15cmを目標とします。雑草が多いほ場では、あらかじめ播種前にロータリー耕を数回行い、雑草を抑えます。
- ・基肥は、3要素の入った普通肥料を用い、窒素成分で4～6kg/10a、りん酸、加里成分は10～

13kg/10 a を目安に施用します。

## ○播種適期

- ・播種適期は、県沿岸部では9月下旬～10月上旬、内陸部では9月中旬～9月下旬です。
- ・播種適期における10 a 当たりの播種量は、全面全層播きで10～15kg、ドリル播きでは8～10kgです。極端な早播きでは越冬前の生育が旺盛となり、雪腐病や雪害が増加し、播種期が遅くなると生育量が不足して減収することから適期播種に努めます。
- ・極端な深播きは出芽不良の原因となるので、播種深度は2～3 cm程度となるようにします。

## ○雑草防除

- ・土壌条件や発生雑草の種類を考慮して薬剤を選定します。土壌処理剤は、麦の出芽前遅くとも播種後5日以内に散布します。
- ・土壌処理剤で抑えきれなかった雑草は、選択性のハーモニー75DF水和剤を使用して防除します。本剤は広葉雑草には効果が高く、葉齢の若いスズメノテッポウ以外のイネ科雑草には効果がないので注意します。

## 〈 野 菜 〉

これまで高温で経過していましたが、8月下旬から夜温が低下しており、露地野菜の生育が緩慢な傾向にあります。また、病害やトマトの裂果などが発生しやすい状況になっています。適切に管理して生育の維持・回復に努めてください。

## ○キュウリ

- ・茎葉の繁茂により通風しが悪く、べと病などの病害が発生しやすい状況にあります。支柱アーチの天面に側枝が繁茂している場合は、整枝を行って通風を図ります。また親つるを中心に古い葉は摘葉して日当たりを良くし、側枝の発生を促します。
- ・褐斑病の発生がみられる場合は、発病葉をただちに摘除してほ場で処分し、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤、スミブレンド水和剤のいずれかの薬剤を散布します。その後、ジマンダイセン水和剤、ダコニール1000、ドーシャスフロアブル等の薬剤を散布し予防に努めます。なお、アミスター20フロアブルは、薬害を避けるため浸透性を高める展着剤は加用せず、高温時は使用しないようにします。各薬剤の散布は7日間隔程度で行いますが、降雨が続く場合は散布間隔を短くします。
- ・露地キュウリでは強風の影響で茎葉が傷み、樹勢や果実品質が低下するので、台風など強風が心配される場合は、防風ネットや支柱にゆるみがないか、あらかじめ点検しておきます。強風被害を受けた場合は、傷んだ葉や果実を取り除いた後、病害予防のために殺菌剤を散布します。
- ・ハウス抑制栽培は本格的な収穫期を迎えます。抑制作型はべと病、褐斑病、うどんこ病等の病害が多発しやすいので、予防防除に努めます。

## ○トマト（夏秋どり）

- ・今後は裂果が多くなることが懸念されるので、かん水や追肥は少量にして、こまめに回数を増や

します。また、これから夜温が低下する時期を迎え、着色や果実肥大に時間がかかるようになるので、最低気温が13℃を下回るようになったらハウスサイドを閉めて保温します。

- ・灰色かび病や葉かび病などの病気が多い場合は、保温よりも換気を優先して湿度を高めないように管理をします。ただし、ハウス内の最低気温が10℃以下にならないように注意します。

## ○アスパラガス

- ・長期どりの作型の収穫は、平均気温が16℃を下回る今月末まで続きます。気温の低下に伴って萌芽数が少なくなりますが、収穫しないで放任しておくことで養分の蓄積が制限されるので、最後まで収穫作業を行います。特に、奇形茎、曲がり茎については早めに整理します。
- ・気温の低下と秋雨により、茎枯病や斑点病が増えてくる時期になります。8月中旬以降、各種病害が増加傾向にあります。今後の夜温低下と降雨によりさらに斑点病の拡大が予想されるので、注意が必要です。
- ・9～10月に茎葉を健全に保つことが次年度の春どり収量に大きく影響します。特に、今年新植したほ場では、秋期に病害が発生すると翌年以降も病害が発生しやすくなるので、稲刈り前の防除を確実にを行い、発病を抑制します。

## ○ホウレンソウ

- ・気温が下がるとホウレンソウケナゴナダニの被害が増えてきます。被害が心配されるほ場では、ネマモール粒剤30を播種前に全面散布し耕起します。その後、本葉2葉期と4葉期にカスケード乳剤を散布します。
- ・ケナゴナダニは、有機質肥料やカビ類、残さなどを「えさ」として増えます。このため、特にカビ類が増えやすい未熟有機物は使用しないことや、前作の残さはすき込まないことが重要です。

## ○ネギ

- ・秋冬ネギの最終の土寄せを9月に行う場合は、収穫予定日の3週間前を目安とします。最終土寄せ後に、培土の沈降や葉鞘部の伸張があると軟白部の仕上がりが悪くなることがあります。このような場合は、状況を良く見て追加土寄せを行うと軟白部の品質が向上します。
- ・今後は気温の低下に伴って、さび病の感染に好適な気象条件となってきます。発病が見られる場合は、治療効果及び残効性のあるアミスター20フロアブルやオンリーワンフロアブルを散布します。
- ・ネギアザミウマ等の害虫被害が増えてくる時期です。今年は発生がやや多いので、寄生密度が高くなる前にハチハチ乳剤やアグロスリン乳剤等で防除します。

## ○エダマメ

- ・県オリジナル品種の「あきた香り五葉」が収穫期を迎えます。「あきた香り五葉」のセールスポイントである食味の良さを活かすためには、収穫始期をよく見極めて適期に収穫します。
- ・収穫始期の判断基準としては、①開花から収穫までの日数が48日前後で、積算気温が1,150℃に達した頃、②側枝の2粒莢の厚さが8ミリ以上の莢割合が6割程度になった時点、③株全体の葉色が少しさめた頃、④莢色が鮮やかになり、毛が立ってくる頃、が目安になります。
- ・収穫終期は、側枝の2粒莢に厚さ11ミリのものが見えてくる頃です。これより遅くなると莢色、香り、食感が落ちてきます。

- ・エダマメは、収穫後の温度が高いほど、外観品質が低下しやすく、また、食味に關係する糖やアミノ酸が減少します。収穫作業は涼しい時間帯に終えるようにします。収穫後もできるだけ涼しい場所に保管し、選別調製が終わったら速やかに予冷库に入れ、品温を下げるようにします。

## 〈 果 樹 〉

### ○果樹の生育状況

りんご、なしの果実肥大は、平年並からやや大きめとなっています。

表1 りんご、なしの果実肥大（8月14日）

樹種	地域	品種	縦経（平年比）	横径（平年比）
りんご	鹿角市	ふじ	6.66cm（105%）	7.17cm（103%）
	横手市	ふじ	6.48cm（100%）	7.49cm（103%）
なし	潟上市	幸水	6.85cm（115%）	8.37cm（117%）

※果樹試験場本場・天王分場、かづの果樹センター調査

### ○りんご

#### ●収穫

- ・早生種の「つがる」は、県南部では8月下旬から収穫が始まっています。着色にとらわれず、地色や味、硬さを見て、すぐりもぎを行います。

#### ●着色管理

- ・葉摘み作業を行う前に支柱立てや枝吊り、徒長枝のせん去を行い、樹の内側まで光が入るようにします。
- ・葉摘み作業は2回程度に分けて行います。1回目は、果面の約30%が着色した頃に行い、果実周辺の葉を軽く摘み取る程度にします。2回目は新梢葉も含めて強めに行い、同時に玉回しも行います。
- ・日焼け果の発生防止のため、葉摘み作業は日中、果実温度が十分上がってから実施します。

表2 葉摘み作業時期（県南部）の目安

品種	1回目開始時期	2回目開始時期
やたか	9月上旬頃	9月中旬頃
ふじ	9月下旬頃	10月中旬頃

#### ●その他

- ・「千秋」や「やたか」で例年落果の多い園地では、対策として、落果防止剤を散布します。

### ○日本なし、ぶどう、ももの収穫

- ・日本なし「幸水」や、ぶどう「キャンベル・アーリー」、もも「川中島白桃」が収穫期に入っています。収穫は、果皮色や地色、食味等で成熟の程度を確かめて行います。また、早朝など冷涼な時間帯に収穫を行い、収穫後は涼しい場所に置き、出荷基準を守って速やかに出荷します。

## ○共通

- ・秋肥は、秋根の発生する時期に養分を吸収させることで、貯蔵養分を充実させるために行います。効果を上げるために尿素等の速効性肥料で時期を逃さず施用することが重要です。また、樹勢を観察し、樹勢の弱い樹は施肥量を多めに、強い樹は施用しないか少なめにするなど、施肥量を加減します。
- ・りんごでは、表3の施用時期を参考に、水田転換園や県南部の黒ボク土で2～3kg/10a、傾斜地や県北部の園地で3～4kg/10aを目安とします。

表3 りんごの秋肥の施用時期の目安

品種等	施用時期
早生種	9月上旬～中旬頃
中生種（やたか・ジョナゴールド等）	9月中旬～下旬頃
晩生種（王林・ふじ等）	9月下旬～10月上旬頃

- ・日本なしでは、9月中～下旬に、砂質土壌で3～4kg/10a、それ以外の土壌で1～2kg/10aを目安に施用します。
- ・ぶどうでは、9月中～下旬に、1～2kg/10aを目安に施用します。
- ・農薬の使用に当たっては、適用作物、使用時期、使用濃度、散布回数等を確認します。また、周辺作物に農薬が飛散しないように注意します。
- ・9月は台風が多いので台風情報に留意し、襲来が予想された場合は成熟した果実を収穫し、支柱等による樹の補強、防風施設等の点検・補強を行います。

## 〈花き〉

### ○ストック

- ・生育適温は日中15～20℃、夜間5～10℃です。気温が高いと徒長し、太みがつかないので、できるだけ換気を図り、ハウス内の気温低下に努めます。
- ・通風を図ることで、茎葉が硬く、しまった株となることから、十分に換気します。
- ・定植直後のかん水は十分に行います。活着後は、根を張らせるためやや控えますが、萎れさせないように注意します。生育中期～発蕾までの晴天時は、3～5日間隔を目安としてかん水します。
- ・この時期のかん水にバラツキがあると生育の不揃いや曲がりを生じます。また、過度なかん水は軟弱徒長となりますので、適切なかん水量で生育の不揃いや徒長を避けます。
- ・害虫では、蛾や蝶が問題となります。特にコナガは薬剤抵抗性がつきやすいので、同系薬剤の連用を避け、発生初期から徹底した防除を行います。

### ○リンドウ

- ・彼岸向けの品種の採花時期となります。切り遅れや切り忘れのないよう採花、出荷します。採花するときは、株養成のため全切りせず、株当たり2～3本を残します。
- ・害虫では、ハダニが問題となります。高温乾燥で多発しますが、とても小さく見のがしやすいので、こまめに観察し、適期防除を心がけます。

- ・害虫の密度を低下させるには、ほ場内や周辺の適期の雑草防除が有効です。
- ・病気では、葉枯病や黒斑病、褐斑病が問題となりますので、定期的な薬剤散布により防除します。特に、雨が多かったり、葉が濡れている時間が長いと発生しやすくなるので、天候に応じて散布間隔を変えます。また、盆咲き品種など、採花を終えた株も忘れずに防除し、翌年に備えた管理を行います。
- ・定植1年目の管理としては、花摘みが重要となります。開花した花を付けていると株養成の妨げになるので注意します。

## ○秋ギク

- ・秋ギクは、電照で日長を長くすることによって花芽分化を抑え開花を調節します。近年は、午後9時30分から午前2時30分までの5時間電照（深夜電照）が一般的です。電照の打ち切り時期は、出荷予定の50～60日前が基本です。品種によって異なりますので、種苗メーカーに確認するか、地域の状況を参考にします。
- ・秋ギクで発生しやすい「うらごけ」や「露芯」を防ぐため、再電照を行います。時期は品種によって若干異なりますが、一般的には電照打ち切り10日後（キクの花芽分化ステージでは総苞形成期）、「神馬」の場合は電照打ち切り12日後（小花原基形成前期）に、深夜電照4～5時間を行います。ただし、再電照の時期は、天候や管理条件によっても異なるため、必ず花芽分化の状態を検鏡によって確認し、決定します。

## ○トルコギキョウ

- ・9月後半には夜温が低下してくるので、15℃を目標に保温します。ハウスを閉めるようになると、花卉等に灰色かび病が発生しやすくなるので、換気を十分に行います。加温設備がある場合は、短時間でも稼働させ湿度を下げると発生を予防できます。
- ・9月以降は日長時間・日照などが少なくなってくるため、プラスチックの発生も多くなります。対策として、明期延長方式で16時間日長となるように補光電照を行います。

## ○ダリア

- ・露地を中心に収穫盛期となります。
- ・収穫は朝か夕方涼しい時間帯に行います。
- ・下位節の搔いてない芽は次の収穫枝として残し、その節のすぐ上部にハサミを入れて収穫します。
- ・切花長を確保したい場合や、株が混んできて芽整理が必要な場合は、枝の根元から収穫します。常に、「次の収穫枝をどのように立ち上げるか」を考えながらの収穫となります。
- ・収穫後は切り口を乾かさないように、すぐに水につけます。この作業を怠ると、その後の水揚げに影響するため注意します。
- ・切前は花卉の2～3重目が開いた頃とし、堅切りや咲きすぎに注意します。

## 〈畜産〉

### ○稲発酵粗飼料（稲WCS）収穫・調製のポイント

- ・稲WCSの収穫時期は黄熟期（出穂後30日頃）が適期です。特に専用収穫機（ダイレクトカット方式）では、良好なサイレージ品質を確保するためにイネの水分含量が65%以下となる黄熟

期に収穫することが大切です。また、飼料用イネは茎が太く中空であるため、空気が残りやすく嫌気状態の保持が難しいので、乳酸菌製剤を添加して品質の安定を図ります。

- ・コントラクターにおいては作業を円滑にすすめるため、ほ場状態や作付品種、登熟状況等を巡回確認した上で、作業計画を立てることが大切です。
- ・ラッピングしたロールはグリッパーで扱うと加圧と解放によって空気が進入するので、移動等は最小限にするよう努めます。保管は縦置き2段積みまでとし、ロールの間を20cm以上離して積むようにします。また、周りに防鳥ネットやテープ等を設置して鳥獣害を防止します。
- ・牛への給与は、乳酸発酵を経て品質が安定する収穫後3週間以降とします。

### ○飼料用とうもろこしの収穫・調製のポイント

- ・サイレージ調製の収穫適期は黄熟後期です。目安は、子実を爪で押しても汁が出にくくなり、雌穂を二つに割って見ると子実の上部が黄色く固くなり、下部が白色となっている境目（ミルクライン）が真ん中くらいになる時期です。
- ・刈り遅れや枯れ上がりが激しい場合は水分が少なく、カビの発生や二次発酵しやすくなりますので、切断長を短くして鎮圧をしっかりとすることが大切です。

### ○夏バテからの早期回復

- ・暑さが落ち着いてくる時期ですが、暑熱対策を継続して行い、暑い時期に受けた家畜のダメージから早期の回復を図ります。特に乳用牛は暑熱の影響を受けやすく、泌乳量や繁殖機能の低下が9月まで続く傾向にありますので、粗飼料の品質確保やビタミン類の補給を十分に行い、給与飼料を切り替える場合は馴致じゅんちに2週間以上かけて行うことが大切です。

(お問い合わせ先)

秋田県農林水産部園芸振興課

TEL : 018-860-1801 FAX : 018-860-3822

E-mail : engei@pref.akita.lg.jp